

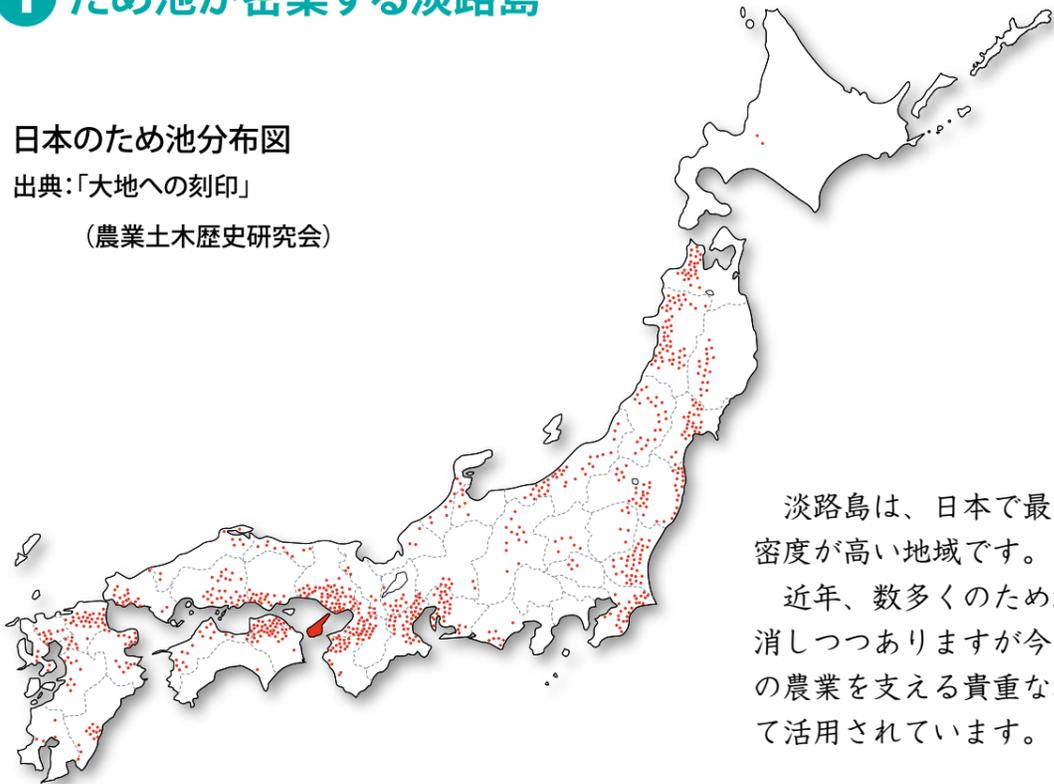
第1章

日本一ため池が 密集する地域「淡路島」

1 ため池が密集する淡路島

日本のため池分布図

出典：「大地への刻印」
(農業土木歴史研究会)



淡路島は、日本で最もため池密度が高い地域です。

近年、数多くのため池が姿を消しつつありますが今なお淡路の農業を支える貴重な水源として活用されています。

淡路島にはなぜため池が多い？

淡路島にため池が多い理由は様々ありますが、主な理由は次のとおりです。

理由その1：年間降水量が少ない

淡路島は、瀬戸内海式気候と呼ばれる温暖で雨が少ない地域に位置し、全国平均の年間降水量1700～1800mmに対し、1100～1400mmしか雨が降りません。

このため、少ない雨水を溜めておけるように多くのため池が築造されました。

理由その2：大きな河川がない

淡路島には大きな河川がなく、また、急流なものが多いことから降った雨がすぐに海へ流れてしま

い、農業用水を必要な時期に河川から十分取水することができません。

このため、河川以外の農業用水源として、多くのため池が築造されました。

理由その3：細い谷筋に小さなため池を数多く築造

淡路島の特に北部では、急峻な山間地域が多く、細い谷筋が入り組んだ地形となっています。

このため、大きなため池の築造が困難で、谷筋を少しずつ堰き止めた小さなため池が、数多く築造されました。

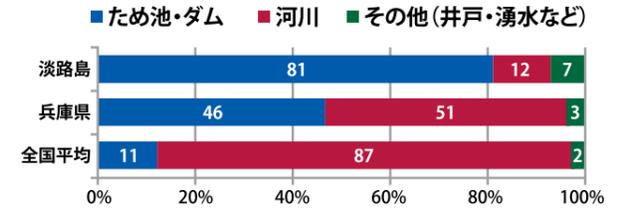
2 淡路の農業になくならないため池

江戸時代には、雨の少ない淡路においても新田開発が進められ、島内の約18%（現在は14%）まで水田の面積が広がりました。しかしながら、「月夜に日焼けする」※ということわざがあるほど、淡路はかんばつ被害にあいやすいことが昔から伝えられていました。このため、新田開発にあわせ、谷筋に数多くのため池が築造されていきました。

この結果、淡路の農業用水源は、他の地域と比較すると圧倒的にため池に依存しているものとなっています。

※「月夜に日焼けする」

月の光でも水田が干上がってしまうほど水量が少なく、かんばつ被害にあいやすいということ



農業用水源の区分

出典：「ため池実態調査」(財)日本農業土木総合研究所)ほか

3 淡路のため池の特徴

(1) 様々な種類のため池が多数存在

淡路では地理的な状況から様々な種類のため池が築造されました。谷筋を土で堰き止め造られた「谷池」、平地に土を盛って造られた「皿池」、川を堰き止め造られた「川池」、そして近代になって築造された大規模なため池「農業用ダム」があります。また、幾つかため池が連なった「重ね池」も多く見られます。

一般的に淡路市や洲本市に多い中山間地域には小規模な谷池が多く、南あわじ市のような平野部には皿池が多く築造されました。また、規模の大きな農業用ダムは比較的山が高く谷が深い諭鶴羽山系に多く築造されました。

淡路のため池分布図

(貯水量1万m³以上の約700カ所)



池名	場所	貯水量 (千m ³)	備考
1 だいにちがわ大日川ダム	南あわじ市北阿万新田北	2,100	粗石コンクリートダム形式
2 あいやがわ鮎屋川ダム	洲本市鮎屋	1,800	コンクリートダム形式
3 ほんじょうがわ本庄川ダム	南あわじ市阿万上町	1,720	コンクリートダム形式
4 こうだいき上田池	南あわじ市神代社家	1,440	粗石モルタル形式
5 だいにしやういけ大城池	洲本市鮎屋	1,047	
6 ときわ常盤ダム	淡路市野島常盤	669	
7 うらかへおおいけ浦壁大池	南あわじ市神代浦壁	665	
8 たにやま谷山ダム	淡路市楠本	412	
9 かききだいにいけ柿ノ木谷池	南あわじ市湊里	386	コンクリートダム形式
10 とかわいけ戸川池	南あわじ市賀集野田	370	

淡路のため池・農業用ダムの貯水量 ランキングトップ10



いろいろな種類のため池

谷池(淡路市大谷「床池」)



皿池(南あわじ市八木寺内「寺内皿池」)



農業用ダム(南あわじ市北阿万新田北「大日川ダム」)



重ね池(洲本市上加茂(手前から)「中池・菰池」)

(2) 田主と呼ばれるため池管理者

ため池にはそれぞれ管理者がいます。大事な水を一定のルールにしたがって利用するため、各ため池ごとにその水を利用する農家が集まり「田主」と呼ばれる淡路特有の管理組織ができました。

「田主」は、ため池が多く築造された江戸時代中期以降にでき、ため池だけでなく、川や

井戸、湧水にも組織されています。

「田主」は、ため池や水路等の水利施設の管理をはじめ、田への配水などの用水管理も行っています。

なお、「田主」という呼び名の由来は、当時の地主的な役割であった「名主」から発展し「田主」となったという説が一般的です。

(3) ため池の用水管理

ため池から田へ配水する際には、番水方式※1と分木方式※2と呼ばれる方法で水量を管理してきました。番水方式は淡路北部、分木方式は南部に多いと言われています。また、他にも切り流し方式※3というものもありました。配水する際には、田主の「水守」、「番水」と呼ばれる水当番が管理していました。

また、「親子池」と呼ばれる、ため池同士を水路で結んで水を有効利用する方式など、田主はため池の水管理に優れた独自の慣行を代々受け継いでいます。

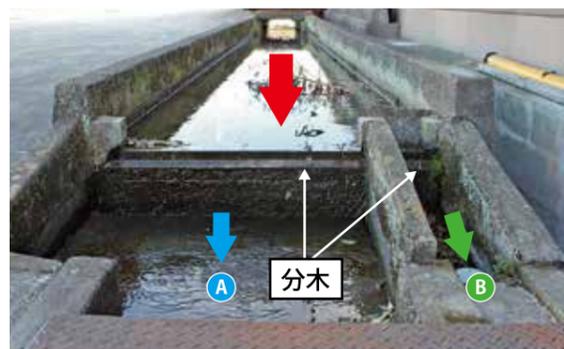


配水時間を示す番水表(南あわじ市)

※1 番水方式: 「名(みょう)」とよばれる配水区域に流れる各用水路に、4時間程度ごとに順番に配水していく方式。

※2 分木方式: 各用水路への配水量を、分木の幅により調整(=かけ流し)する方式。分木の幅が長ければ、水量も多くなる。

※3 切り流し方式: 水不足のとき、ため池に近い田にため池の水を流し込み、ため終わると、その田のあぜを壊し、その下にある田へ水を流す方式。それを繰り返し、多くの田に水を送る。

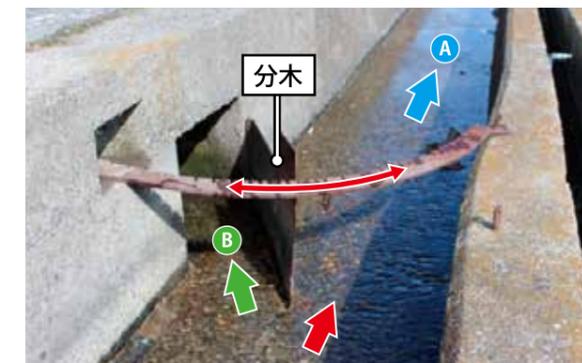


分木方式を用いた配水(南あわじ市)

※用水路AとBの配水量を分木で調整



近代に造られた円筒分水(分木方式の一種)
(南あわじ市神代浦壁)



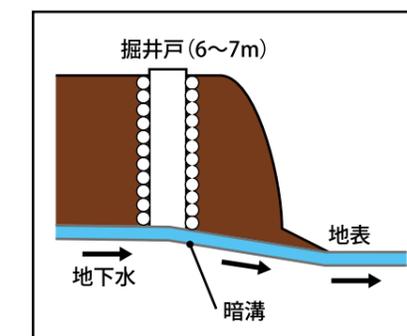
分木方式の一種(洲本市前平)

※用水路AとBの配水量を分木の角度で調整

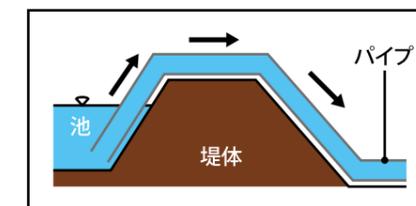
(3) ため池の用水施設

淡路のため池は、周辺に降った雨水だけでたまるものが比較的少なく、山すそや河川から溝を引き、用水を引き入れてためています。この溝を淡路では「男溝」または「男井手」と呼んでいます。

その他、明治時代に南あわじ市で考案された「暗溝」とよばれる横堀井戸、ため池堤体の上下流の水位差を利用した「サイフォン」による取水などの利水形式があります。



暗溝の構造図



サイフォンの構造図

第2章 歴史の話

1 1700年以上前から築造されてきた淡路のため池

ため池の歴史は古く、稲作が行われるようになった弥生時代には、既にため池が造られていたと言われています。ため池の約7割は江戸時代以前に、残りの約3割は明治以降に築造され、各地域において試行錯誤を繰り返して得られた経験をもとに築造が進められたと推測されています。

淡路では、昭和53年度に約1700年前の古墳時代前期の水田跡である「淡路志知川沖田南遺跡(南あわじ市松帆志知川)」で、水路や樋と共にため池跡が発見され、昔からため池が造られていたことが分かりました。

また、洲本市下内膳の曇華池では、平成12年に奈良時代の木樋が発見されました。木樋とは、ため池の堤の中を通る木製の管のことで、クスノキをくりぬいて蓋をする構造は、当時では先進的な技術であり、水田開発の先進地であったことを示していると言われています。

参考：農林水産省 HP



出土した木樋
(淡路文化史料館所蔵)



淡路志知川沖田南遺跡



溜池状遺構

出典：淡路・志知川沖田南遺跡(昭和62年)

2 淡路最古のため池改修 中山大池(南あわじ市中条広田)

淡路で最も古いため池の改修は、古文書「味地草」※で確認できる南あわじ市中条広田の中山大池です。「広田の大池(中山大池)は七度切れた(決壊した)。八木の皿池末代よ」と

いう歌が残されているほど度々決壊した池で、池自体は昔々からあったが、かんばつ被害があったことから1591(天正19)年に改修されました。早朝6時から午後6時までと定めて、

ぶぎょうにん 奉行人、広田の農家総出で改修にあたり30日あまりで改修されました。大寒波の年に短期間で改修したことを見ると、かなりの犠牲者を伴ったであろうと考えられています。

現在は、農業用以外にもゴルフ練習場としての利用や都市近郊のため池として、地域に大切にされています。

参考：合併20周年記念誌 緑町風土記



※「味地草とは？」

「味地草」とは、旧津名町志筑生まれの洲本藩士の小西友直とその子錦江の二代に渡る20年あまりの研究の結果、1857(安政4)年に完成した淡路の郷土史。従来の郷土史を基礎に、各町村地誌を一層詳細にしたもので、淡路の郷土史が集大成されたものである。淡路文化史料館所蔵の「味地草」



淡路文化史料館所蔵の「味地草」

●ため池データ

	中山大池
貯水量(m ³)	30,000
堤長(m)	254.0
堤高(m)	5.5
受益面積(ha)	75.0

3 三原の三大ため池 「太郎池、次郎池、三郎池」の築造

元禄時代(1688~1703年)、徳島藩が税の増収のため稲作地を増やす方法として、各地にため池を造らせました。まず洲本市の旧大野村に太郎池(現在の金屋大池)を築造し、その後、南あわじ市の旧寺内村に次郎池を、南あわじ市の旧神代村に三郎池(現在の浦壁大池)を築造しました。これらは「三原の三大ため池」と呼ばれています。

参考：ふるさと八木



太郎池(現金屋大池)(洲本市金屋)



次郎池(南あわじ市八木寺内)



三郎池(現浦壁大池)(南あわじ市神代浦壁)

●ため池データ

	太郎池(金屋大池)	次郎池	三郎池(浦壁大池)
貯水量(m ³)	175,000	190,000	665,000
堤長(m)	547.0	200.0	380.0
堤高(m)	8.1	9.4	12.1
受益面積(ha)	28.5	70.0	72.0

4 ぶんけん 文献に残るため池の築造記録

るたにいけ おだ 路谷池(淡路市小田)の記録

旧浦村(現在の淡路市浦地区)は大きな川や池が少なく、雨が少ない年はかんばつによって水争いが絶えなかったそうだ。それを解消するために、当時の庄屋の善見新兵衛は、毎日のように池の候補地を探しまわり、ついに路谷に最良の地を見つけた。しかし、その池を造るためにはさまざまな困難が立ちわだかまった。路谷池のある土地はほとんどがとなり村のものであったために、そのお許しをもらうことは大変なことであった。また、阿波藩や奉行所へお許しがでるまで何度も足を運んだ。そのかいあって、藩の工事として、わずかではあったが資金の援助をうけることになり、残りの資金は新兵衛が立て替え調達した。

ついに1813(文化10)年11月に工事が始まり、翌年の1814(文化11)年4月24日に完成した。現在でも機械を使って造ると1年以上もかかる工事を、人の手によって約6カ月で完成させたのであった。池ができて米作りが始まり、新兵衛が立て替え調達した工事資金は、少しずつでも返されたが、10年余りの歳月を要したと言われている。

新兵衛没後7周年には、その偉業をたたえ、顕彰碑が村民によって建てられ、1922(大正11)年に、新兵衛の100年祭が盛大に行われた。

引用：路谷池ものがたり、東浦町史



画：稲井てる子

●ため池データ	
	路谷池
貯水量(m ³)	110,000
堤長(m)	73.0
堤高(m)	14.5
受益面積(ha)	130.0

たきいけ やなぎさわ 滝池(淡路市柳沢)の記録

滝池は旧津名郡最大のため池で、淡路では旧三原郡の浦壁大池につぐ規模である。廣田家初代から3代にかけて、柳沢の50haの田を養うために、村人一丸となって築き上げた。柳沢には幕末、ため池が300余りもあった。これは、皿池のような小池ばかりで貯水量も少なく、すぐに干上がっていた。滝池の計画は開発の祖、初代庄屋廣田五兵衛直次が考案し、位置や大略の設計を仕上げた。2代重太夫直員が更に研究し具体化し、3代直宜とともに築造にかかり、1701(元禄14)年村人総出で完成させた。その後は、明治になるまでの資料はなく、明治時代に滝池の堤防工事をした記録がある。1973(昭和48)年に県営ため池改修事業により大規模な改修が行われた。

引用：一宮町史



●ため池データ

	滝池
貯水量(m ³)	258,000
堤長(m)	131.0
堤高(m)	14.2
受益面積(ha)	30.0

滝池は大きなげぶつ(米櫃)※じゃ

滝池築造三百年記念祭の時の1928(昭和3)年ごろから約40年間滝池の管理にたずさわってきた後庵幸一氏の談話です。滝池を大切にしたい気持ちが伝わってきます。

滝池の設計は300年前のことなのにうまくつくったもの。廣田の庄屋さんはよっぽど頭のいい人であったのだ。(中略)滝池は柳沢の大きな、げぶつである。そう思うから滝池築造300周年を盛大に祝うことが出来た。滝池に対する愛着はひとしおである。今休耕田がいっぱいできてきた。政府の役人は口先で生きている。2年か3年田をそのままにしておいたら山になってくる。こんど田に戻そうにも戻らん。みんな命がけて開墾し守ってきたものを粗末にしすぎる。大池ばかりでなく小池は小池なりに守ってきている。大事にしなければ

ばいけない。

「水は天からのもらい水」「湯水の如く使う」といって、水を粗末にしすぎる傾向にある。水も大切な資源で限りのあるもので、もっと大切にしなければいかん。蛇口をひねると水が出る。ボーリングをしたものをポンプで上げる。それは楽である。だが山の木を切りその跡に植林もせず、それで水がためられるか。それどころか山の土をよそへ売っている。昔の人は一握りの土でも一本の木でも大切に育ててきた。文化遺産をもっと大切にしたいものじゃよ。 引用：一宮町史、澤無窮

※[米櫃とは]

米を保管する箱のこと。滝池そのものが、米を入れる器のように考えられており、その言葉は地元の人々に受け継がれています。